

座長

鈴木卓先生

帝京大学医学部
救急医学講座
主任教授

演者

江木盛時先生

京都大学大学院医学研究科
侵襲反応制御医学講座・麻酔科学分野
教授

整形外傷外科医が知っておくべき 外傷患者の全身管理

- 症例から学ぶ致命的ピットフォールとダメージコントロール戦略 -
Systemic Management of Trauma Patients for Orthopaedic Trauma Surgeons:
Learning Fatal Pitfalls and Damage Control Strategies Through a Case-Based Approach

▶日時

2026年6月27日(土)
12:00~13:00

▶会場

第4会場
ホテルグランヴィア岡山
4F「フェニックス(D)」
〒700-8515 岡山市北区駅元町1番5

【認定単位】

■日本整形外科学会 教育研修講演単位

受講料 : 詳しくは学会ホームページをご覧ください。

取得単位Nの必須分野 : [2] 外傷性疾患 (スポーツ障害を含む)

取得単位 : (N)

整形外傷外科医が知っておくべき外傷患者の全身管理

- 症例から学ぶ致命的ピットフォールとダメージコントロール戦略 -

Systemic Management of Trauma Patients for Orthopaedic Trauma Surgeons: Learning Fatal Pitfalls and Damage Control Strategies Through a Case-Based Approach

自転車運転中に交差点で自動車との接触事故により搬送された 68 歳男性。顔面腫脹と鼻出血を認め、意識レベルは GCS 13、胸部、腹部、左大腿に疼痛を訴えている。画像検査では顔面骨折、多発肋骨骨折、肺挫傷、脾損傷、大腿骨骨幹部骨折を認めた。救急外来初療時の血圧は 120/80 mmHg、脈拍 120/分、Hb 12 g/dL であった。本症例の診療経過を通して、多発外傷患者における全身管理の視点を共有する。

整形外傷外科医は外傷診療において筋骨格系損傷の治療に中心的役割を担うが、多発外傷患者では気道・呼吸・循環の異常が予後を大きく左右する。局所損傷としての骨折に注意が向きやすい一方で、時間経過とともに顕在化する全身性の病態が転帰を悪化させる可能性がある。本症例においても顔面外傷に伴う遅発性気道閉塞の危険性、頭部外傷やショックに起因する意識障害、多発肋骨骨折による疼痛に伴う低換気と呼吸不全、脾損傷に伴う出血進行など、初療時には顕在化しない問題への注意が重要である。

さらに外傷患者の転帰を規定する lethal triad（低体温・アシドーシス・凝固障害）は出血傾向を増悪させ予後不良と関連する。大量出血が疑われる場合には晶質液過剰投与を避け、赤血球、新鮮凍結血漿、血小板をバランスよく投与する輸血戦略が重要である。また生理学的に不安定な症例では definitive fixation を急がず、侵襲を最小限とする damage control orthopedics の概念に基づき、創外固定などを用いた段階的治療戦略が救命につながる。

症例ベースに全身管理の重要ポイントを提示することで、整形外傷外科医の皆さんが多発外傷患者において全身状態を踏まえた意思決定を行う重要性を共有したい。外傷患者の予後改善には筋骨格系損傷の治療のみならず、全身状態を踏まえた戦略的判断と多職種連携が不可欠であり、本講演が外傷チーム医療の重要性を再認識する契機となることを期待する。

京都大学医学部附属病院 麻酔科 集中治療部
江木 盛時